G・ボッテーロ『国家理性論』（1589　ヴェネツィア刊）
――第 7 巻――

石　黒　盛　久

【解題】

過去二年にわたり本学学校教育学類刊行『学校教育学類研究紀要』(6, 7, 8 号) ならびに外国語教育研究センター刊行『言語文化論叢』(18, 19 号) の場を借りて、16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて活躍した政治思想家、G・ボッテーロの著作『国家理性論』の翻訳と注解を、その第 6 巻にいたるまで進めてきた。その間の分析を通じて本書がまず第一巻において、持続的安定性を有する世襲君主政に基づく現状維持を旨とする〈中型国家〉を理想としつつ、その内部に実現する秩序＝道徳の遵守を称揚することが明らかにされた。こうした姿勢がキリスト教的道義心と権力政治の調和を企図する、反マキアヴェッリ主義者ボッテーロの基本的立場を示すものであることは論をまたない。

だが彼はこうした基本姿勢を示す第一巻に続き二巻以降の叙述において、かかる秩序＝道徳が、これに外在する君主＝立法者の作為として、その美徳・熟慮の操作を通じ構築される人工物に他ならないこと、従って君主が通常自身の構築になる秩序＝道徳を遵守することに利益を見出す一方、秩序がその外部世界と対決する例外的事態に直面した場合時として、自身の創出になる秩序＝道徳を超出する創造的な権利と必然を有することが示唆されていく。こうした君主＝立法者による秩序＝道徳からの超出即ち国家理性の行使は、第 4 巻における、自身の構築になる政治秩序内に組み込まれつつも、外部との接触を通じ常にそれから逸脱する可能性を有する、支配下の二種の極端な

臣民（勢力者と貧民）の操縦にはじまり、第五巻における新たに自身の政治的秩序の引力圏に引き込んだ臣民の統御法、更には第6巻における、己が新旧の支配地と未だ自身の支配＝秩序の外部に残された世界との境界面としての国境地域の防衛へと進んでいく。こうした叙述の段取りは換言すればその利害の観点から見て、立法者＝君主自身が自身の定めた法への随順に自足し得る段階から、より幅広い自由裁量を必要とする段階へと向かう展開に即したものと申せよう。

これらを踏まえて当第7巻そしてそれに続く8巻では、他国への勢力拡張＝侵略という、究極の超法規的行為即ち国家理性の行使の予備作業としての富国強兵策が論じられる（具体的な侵略＝戦争術については第9巻が当てられることとなろう）。ボッテーロにつき詳細な研究を著しているF・シャボーによればこうした富国強兵策への着目こそ、マキアヴェッリのそれを含む彼以前の政治議論の非経済的性格と対比した際の、ボッテーロの議論の最も独創的な側面であり、それゆえボッテーロは時に西欧思想史上最初の〈政治経済学者〉と賞賛されることとなる。人口の動態と関税収入や国家財政の連関をめぐる彼の考察が、続く世代の〈政治経済学者〉たちにどのように継承されて行ったかは、今後大いに進化されるべき論題であろう。

翻訳と注解

第七巻

第一章　勢力について

これまで我々は君主が、その人民を安寧に支配することが出来る対策につき論じてきた。そこでこれに続いて以下においては、彼がその国を拡大するための方策につき語ることとしよう。それは私が常日頃、思慮と器量にとっての道具と称しているところの、勢力なるものに他ならない。君主の勢力と称されるものにつき、詳細に語るとなれば長々となってしまうから、とりあえずここにおいてはその内の主要なものにつき語ることで、満足しておくこ

ととしたい。この主要なものとは即ち、人民の数と資質、金銭、食糧弾薬や軍馬の数、攻守の兵器といったもののことに他ならない。私はここで弾薬や兵器を如何に供給するかついて、仔細に述べようとは思わない。なぜなら海陸のあらゆる軍事機材を取りそろえたヴェネツィアの軍需工廠が、賢明な君主に対して手本を提供してくれているからだ。この一マイル半をわずかに超えるばかりの高い壁に囲まれた一帯に、海陸の戦争に必要となるあらゆる種類の物資や機械が結集されているので、それを見た誰もが、自身の目を疑ってしまうほどのものである。そこで巨大な覆いの下、大小さまざまの艦船が集められ手入れを受けている様は、まことに筆舌に尽くし難いほどの壮観である。その整備作業は休みなくまた正しい秩序をもって進められるため、隅々までの艤装がたった一日で終わってしまうこともしばしばだ。ここには火薬用の硝塩もたくさん集積してあるし、あらゆる種類の大砲に必要なその他の物質も豊富にある。また仕立てのよい槍や刀剣、火縄銃、胴丸、兜、丸盾などもたくさん集められている。それは臆病者を一見で驚倒せしめるに十分なほどでも、反対に勇気凛々たる者の戦意を掻き立てるに十分なほどのものでもある。ここにはその他にも、鉄や青銅を一杯に収めた倉や索用の麻を収めた倉、砲弾や釘、錨などを収めた倉もある。また他の場所では青銅が溶解され、そこから大砲が鋳造されたり、また別の場所では麻縄づくりや帆索や帆自体そして船員服の仕立てが行われてもいる。また他の場所には材木が集積され、帆柱や帆桁、甲板など船造りに関わるあらゆるものが作製されている。ここに来る者は、常に武装を怠るまいと志す君主に必要な対策についてのイメージを得ることが出来るに違いない。同様の施設の壮観と重大性を見て取ったヴァスト侯アルフォンソ・ダヴァロスが、ロンバルティアの豊かな四つの都市よりも、大急ぎでヴェネツィアの兵器工廠が欲しいと叫んだのもむべなる哉というものである[1]。

兵糧と軍馬については、交通路と農業について既に述べたこと以上に何かを言おうとは思わない。そこで今や勢力を構成する要素のうち、二つの事柄

---

[1] 1542-1546 の期間神聖ローマ帝国イタリア派遣軍司令官として活躍した、ヴァスト侯アルフオンソ 3 世ダヴァロス(1502-1546)のことと思われる。

のみが残っていることになる。そしてその他の要素は正に、この二つの要素に還元できるのである。それは即ち人口と金銭に他ならない。そして多数の人口を擁している者は結局、多大な金銭をも有することになるのだ。そこで我々は以下に、その他の要素をより自在に取り扱うことができるよう、この類の勢力要素についていささかの言辞を弄することとしたい。

第二章　蓄財は君主にふさわしいことか

相応しい目的を欠いたまま金銭を蓄えることばかりを業とすることほど、君主にとり相応しくないことはない。そもそもこのような業に狂奔することによって、慈愛と恩恵のあらゆる行いが抑制されてしまう。それは臣民が君主に愛情を抱く根が断ち切られてしまうことにつながる。なぜなら臣民の君主に抱く愛情の根の大半が、彼から享受する恵みに据えられているからである。従ってこうした蓄財に励む性情をもつ君主は、通常の定めを越えた課税を臣民に課するようになる。結果としてこうした課税に耐え切れなくなった臣民は、国体や政権の転換を求めるようになり、またこうした課税に反感をもつことにより、何らかの好ましからざる事件をしでかすことになる。また次のことを付け加えなければならない。即ち貪欲と財貨に身を委ねる君主は富と財宝を過信する結果として、しばしば良き統治のその他のあらゆる手段を軽んじるようになる。このようにしてサルダナパルスの例にみられるとおり彼らがその国家を喪失したり、彼らの財貨が敵対者の手中に入るということが起こることになる[2]。このサルダナパルスは 4000 万スクーディという大金を、彼を殺害した者たちに残すこととなった。またペルシア王ダレイオスは彼を撃破しその玉座から追い落としたアレクサンドロス大王に、8000 万スクーディを残した[3]。ペルセウスもまた彼をその王国から駆逐した者たちに、

---

[2] ローマ帝国セヴェルス朝第三代皇帝ヘリオガバルス帝（通称エラガバルス／在位 218-222）のこと。その性的倒錯と退廃した生活により周囲より見放され、近衛軍の反乱により処刑された。

[3] アケメネス朝ペルシア帝国最後の皇帝ダレイオス 3 世（在位前 336-前 330）のこと。アレクサンドロス大王との戦いに敗れ逃亡中、臣下のバクトリア総督ベッソスにより殺された。

その資産を残す羽目に陥ったのだ[4]。貪欲のみをこととする君主が、一体どんな恵み深い心情や栄誉ある計画を抱くことができようか。ティベリウス帝にそう言ってやるがよい。またそれほど古人に立ち戻らずとも、太らせるために自分のブタを臣民に飼養させ、もしそれが死んだ際にはその代金を彼らに支払わせた、ナポリ王アルフォンソ 2 世にそう言ってやるがよい[5]。それどころかこの王は、プーリアのオリーブ油の全てと穀物を買い占め、彼が自分の持ち分を売り切るまで他の者がそれらを販売することを禁じつつ、可能な限りの高値でそれを売りつけるという挙に出た人物である。だがそれ以上に行政や司法の官職を売りに出す君主を、我々はなんと評したらよいというのだろうか。それは君主にとって最も忌まわしく、臣民にとって最も不幸な業であるとは言えまいか。黄金への渇望は君主をあらゆる悪業と不名誉にまみれさせる。そればかりか君主により悪しき手段によって獲得されたこうした財貨は、彼らの跡継ぎどもにより実に悪しきやり方で浪費されてしまう。ダビデ王は多量の金銀を集めるためあらゆるしかるべき手を講じたが、その結果それは 1 億 2000 万スクーディという、一人の王によりこれまで集められた総額を遙かに超える額となった。その全てを受け継いだ彼の息子のソロモンは、彼が神殿建設に費やした費用をそこから捻出したばかりか、都市内や郊外に設けられた夏冬の宮殿、庭園や豪華きわまる養魚場、数えきれないほどの数の車馬、男女の歌い手たち、そのほかありとあらゆる贅沢のためにこの金銀を用いたのである。そして父が彼に残した財貨が十分ではなくなるや、その際限ない負担を耐えることが出来ないため、その大半が彼の子に対し背き去るに至るほどの重税を、人民に課したのであった[6]。ましてや不正に蓄えられ

---

[4] アンティゴノス朝マケドニア最後の王（在位前 179-前 168）。興隆するローマ共和国との間に第三次マケドニア戦争を引き起こしたが、ピュドナの戦い（前 168）の敗北により捕らえられ廃位された。

[5] アラゴン朝ナポリ王アルフォンソ 2 世（在位 1494-1495）。父フェルディナンド 1 世の王位を継承したが、その直後にはじまったフランス王シャルル 8 世のイタリア侵攻に怯え、王位を子のフェルディナンド 2 世に譲りシチリアの僧院に隠遁、数ヶ月後にこの世を去った。

[6] 『列王記』上 12.4-12.14。

た財宝は、一体何をもたらすというのであろうか。人はそこからいったい何を期待できるというのであろうか。ティベリウス帝はありとあらゆる強奪や不正を駆使し、多年を費やして 7700 万スクーディの大金を蓄積した。だがその全ては彼の後継者たるカリグラ帝により、たった一年で使いつぶされてしまったのだ。かくして通常次のようなことが生じてくる。即ち巨額の財宝を手中にした若年の君主はたいてい、風変わりで気紛れな着想に際限なく溺れてしまう。そして自分の財産を過信して、彼自身の力に余る事業に手を出すのだ。彼は平和を憎み近隣諸国との友好を蔑ろにし、必要でも有益でもない、むしろしばしば彼自身にもその臣民にも有害な戦争を始めたりする。このような次第であるから神は王が「自身のために金銀を際限なくかき集める」ことを望まれないのである[7]。

第三章　君主が財を有することは不可欠である

とはいえ平和目的の使用のためにもまた戦争の費用としても君主が、一定額の現金を手元に準備しておくことは、どうしても必要なことには違いない[8]。というのも必要な額の金銭が集まるのを待っていることは、平時にあってもそうだがとりわけても戦争に際しては、困難なことだしまた危険なことでもあるからだ。困難だというのは剣戟の響きというものはそれが聞こえるや否や、商業交通の途を閉ざし、土地の耕作や果樹の収穫を妨げ、結果として通常の関税や消費税の徴収をも、麻痺させてしまうからに他ならない。危険だというのは、敵味方を問わぬ兵士たちの勝手気ままや暴行により損害を受けたり不平を蓄積させたりした人民が、それに加えて君主により金銭をむしり取られ、苦しめられることになった結果、騒動を引き起こすかもしれないからである。換言すればこうした用向きのために、十分な額の金銭を用意しておく必要があるし、それがあるがゆえに敵は彼方に遠ざけられ、土地の収穫

---

7 『申命記』XVII, 17。

8 1590 年ローマ版以降これに続いて「今日にあって国勢というものが領国の広大さに劣らず、金銭の豊富さによっても推し量られるが故に、金銭は君主の名声のためにも必要不可欠なものである」という一句が、挿入されている。

とそこからの収入が、難なく享受されることとなるのである。戦争が旦夕に迫った際、金銭の徴収と武力の発動の二つのうち、どちらがより一層困難であるか私には判断し難い処である。だから戦時において人口以外の何物にも依存しなくて済むように、金銭を手元に十分整えておくことが必要である。さもなければ金銭を捻出する方法を相談しているうちに、敵の機敏さや戦争による混乱が我々から、金銭や兵士を調達する手段を取り上げてしまうこととなろう。トルコの皇帝はその作戦行動を起こす際の、めざましいばかりの敏速さによって知られている。なぜならこうした作戦活動の発起に当たってこの国の皇帝は、彼が手元に有している財宝や現金に依存しているからに他ならない。彼はこれを用いて兵士を雇用し兵器を購入し、あるいは作戦のための他の一切の対策を行っている。そしてしばしば後になって彼は、彼がその人民の上に課した租税によって、これらの支出の埋め合わせを受けることになる。だがその一方で手許金のない君主は、その支出に必要な資金の調達法につき思案し諮問している間に、たいていの場合は行動に最適の時節を失ってしまうし、しばしば勝利の絶好の機会を見逃してしまう。資金調達のため最も頻繁に用いられたやり方は、それにより王と王国を滅亡の淵に追いやる手法、即ち利子をつけて借り入れるというやり方であった。利子の支払いのため先ず通常の税収が用いられ、続いて財源を臨時課税に求めざるを得なくなる。そのあげくにこの臨時課税はたいていの場合、通常課税に転じてしまうのだ。このようにして不都合の埋め合わせを、更に大いなる不都合によって行う羽目に陥り、ある臨時課税の上に更なる臨時課税が積み重ねられていく。そして最後に生じるのが国家の荒廃と喪失という事態である。

さて蓄財には長けていないがそれでもなにがしかの財源が必要となる場合、どのような手段に訴えたらよいだろうか。美徳というものは中道を取るところから生じてくる。つまりそれに血眼になることなく、金銭をかき集めることが肝要だ。それは二つのやり方で可能となる。即ち貴国の税収を高めるか、余分な支出や不適切な供与を控えることによる。

第四章　収入について

君主の収入は二つの途から生じる。即ち通常課税と臨時課税とである。また通常課税は土地の稔りと人間の精励とから生じてくる。土地の稔りからの収入はこれまた二つの途による。即ちある土地は君主の直轄領であり、またある土地は臣下の有に帰している。君主の直轄領とは、彼の世襲領と彼以外誰も所有者をもたない土地のことに他ならない。それらの耕作に関していえば、君主はあたかも一家の良き主のようであればそれでよい。即ちそれらの土地各々の特質がもたらす全てのものを、引き出してやればよいのだ。即ちある土地は穀物の耕作に適し、ある土地は牧畜に適している。また他のある土地は木材を、また他のある土地は—湖や沼や川のように—他のものを産するのだ。また大地の稔りのうちあるものは大地の内部において稔り、あるものは大地の外で稔る。また大地の内部には鉱物が生じ、金や銀、錫や鉄そして水銀、硫黄、明礬、塩などの鉱脈がある。またそれに加えて、数知れぬ種類の宝石や貴石、大理石などがある。大地の上には干し草類や穀類、野菜、大小のそして馴致されたあるいは野生の家畜が存在している。水の利用法は多種多彩だが、それというのもそれが人命の維持の助けとなる、生命体を生み出しているからだ。それは例えば魚や貝類等々であり、あるいは珊瑚や真珠といった非生命体、そしてまた海綿のようにその性質が生命体であるのか非生命体であるのか、定かならぬものもある。アリストテレスは海綿を、生命体と非生命体の中間物に数えているほどである[9]。マホメット 2 世と言えば多くの国々を獲得した人物であるが、彼はこれらの国々に奴隷からなる植民隊を派遣するのを常とした。彼は植民隊のそれぞれに歩行 15 日分の土地と、二頭の水牛及び最初の年の種もみを授けている。彼は 12 年後に収穫の半分を取り立て、それ以降は年々残る半分の 7 割を要求した。かくして彼は永久にかなりの収入を、こうした土地から得ることができるようになったのであった。臣下の有に直接帰している土地について言えば、君主はそこから収入を、租税や賦課金というかたちで獲得することができる。賦課金は共同体がそれ

---

[9] アリストテレス『動物学』VII, 1, 3。

を必要とする事態にあれば、合法的かつ正当なものである。なぜなら各地方はそれぞれ、こうした公共の利益を欠いてはそれ自体維持し難いが故に、各個人の収入が公共の利益に貢献するようにと望むのである。こうした税は個人にかかる税ではなく、資産にかかる税でなければならない。即ち頭割りの課税ではなく、物品にかかる課税でなければならない。さもなければ課税の全ての負荷が通常税の場合と同様に、貧民にものしかかってきてしまうことになる。なぜなら貴顕は平民に負担を押し付け、大都市はその属領にそれを転嫁しようとするからに他ならない。だが時の経過と共に貧民がこれ以上の負担に耐え切れなくなり、その場に倒れ伏すということが生じるようになる。こうなると結局貴顕もまた、その支出に取り組まざるを得なくなってしまうし、フランスにおいて生じているように大都市もまた、巨額の賛助金を払わざるを得なくなるのだ。ローマでは人頭税と消費税の双方に関して、税の負担は富裕層にかかっていた。だが臣民の資産には確実なものと不確実なものがある。我々は不動産を確実な資産、動産を不確実な資産と呼んでいる。不動産以外のものに課税をしてはならない。動産に課税しようと望んだことから、フランドル全土がアルバ公に対して反抗に立ち上がるという事態を引き起こしたのだ。だが極端な必要に迫られて、動産にも課税することを貴殿が望まれるのであれば、ドイツのいくつかの都市において行われているようなやり方を、即ち各人の良心と宣誓に基づき、これを行うのが良いと私は思う[10]。人間の精励に関していえば、この名のもとに私はあらゆる種類の交通や商業を包括している。これらは国境の出入りにあたって課税される。これ以上に合法的で公正な課税はない。なぜなら我らが国内で我らの国のものを用いて利を博した者が、我らに何がしかの謝礼を支払うのは当然ではないか。だがこうした交通・商業に携わる者は、我らの臣民であるか外国人であるかどちらかである。そこで臣民より外国人の方が、何がしか余分に支払うほうが理に適っていよう。このこともまたトルコ人のもとにおいて見られる処である。なぜならアレクサンドリアから取り立てられる事業税に関していえば、トル

[10] マキアヴェッリ『ディスコルスィ』I-55。

コ人には 5%しかそれが課されないのに対し外国人には 10%もの課税がかけられるからである。イギリスにおいても外国人は現地人に比べて、4 倍もの事業税が課されることになる。さて富というものは、日常生活の用に供される物品がよりいっそう豊富にある場所へと流れて行くものであるから、君主たる者その臣民が土地の耕作やありとあらゆる種類の技芸の実践へと向かうよう、ありとあらゆる努力を払う必要がある。だがこのことについては、それにあてられた個所でいっそう詳細に語ることとしよう。

第五章　借り入れについて

税収が必要に対して不足しているとき君主は、臣下の内の富裕な者から不足分を借り入れたり、ないしは利子つきで借金することができよう。だがこれは余儀ない場合を除いては、とるべき手段ではない。なぜなら利子というものこそ国家の滅亡の源となるものだからだ。他方利子無しの借り入れは、君主が債権者を脅しつけることなく、その約束を守り、負債を期限までに支払うのであれば、これを行うことも左程難しいことではなかろう。サン・クィンティーノの戦いで神聖ローマ帝国軍に壊滅的打撃を蒙ったアンリ 2 世は、その軍を再建すべく王国三部会を招集した[11]。その席で彼はシャルル・ド・ロレーヌ枢機卿の口を借りて、各州毎に一人につき 1000 スクーディを無利子で貸し付けてくれる人物を千人、提示すること要請した。それは容易に達成され、王は総額 300 万金に上る軍資金を確保した。これを用いて彼はその軍を再建し、いくつもの要地を占領した。このようにすでに過去の課税で疲弊し切っていた人民を苦しめることなく、その輝かしい事業を遂行する手段を彼は手に入れたのだった。利子つきで金銭を借り入れることによっては、税収の破綻と信用の喪失以外の何物ももたらされないことを、彼はそれ以前に思い知っていたのである。実際この王は多額の負債を残し、フランス王権は

[11] サン・クィンティーノの戦い（1557）において 2 万を超えるフランス軍は僅か 1 万足らずのスペイン軍に大敗を喫した。これが契機となりフランス／スペイン両者の間に和平の気運が高まり、2 年後カトー・カンブレシス条約の締結（1559）により長年にわたったイタリア戦争が終結した。

それに今日に至るまで苦しんでいるのである。

第六章　教会の資産の収公

教会財産は最後の頼みの綱である。それには教皇聖下のご聴許と国家の必要無くしては、手を付けてはならない。なぜなら聖下のご聴許は神の御前でこの行為につき君主を正当化するものであるし、国家の必要は人民に対してこの行為を正当化してくれる。もし貴殿にこれらのうちのどちらかが欠けているなら、そこから資産を徴発することは、ほとんど不可能なこととなる。そのことなら私は多くの実例を示すことができるが、誰も誹謗中傷したくないので、それについて触れることは避けることとしよう。だが次のことだけは言わないでは済まされない。即ちポルトガルのマヌエル王は、アフリカやインドにおける植民事業について、幸運極まりない君主であった。というのもこのどちらの事業についても、彼は信じがたいほどの成功をおさめたからである。それを使うはなから金銀は、さらに増大したと言ってもよい。その後に誰の差し金によるものかはわからぬものの、聖職身分から多額の金を引き出そうという考えが彼に生じることとなった。彼はレオ 10 世教皇からそれを行う許可を与えられた。だがそれがポルトガル国内に知れ渡るや、数限りない不平不満を引き起こしてしまった。強行する必要に迫られていた訳でも無いので、人心の動揺を目にするや王は、せっかく手に入れたこの特権を聖職者たちに移譲してしまったのである。これに対して聖職者たちも王の機嫌を取るため、15 万スクーディに上る献金を行うこととなった。だが一連の事件の結果この時以後、彼の事業と名声は次第に下り坂となって行ったのである[12]。

教会からの資金を獲得するためには二つの方法がある。即ちその不動産を売却するのが一つの方法であり、その収入の一部を取り立てるのがいま一つの方法となる。一度ならずフランスで行われたように不動産の売却は、自身

12　ポルトガル国王マヌエル 1 世（在位 1495-1521）のこと。傍系の六男に生まれながら王位を継承したことや、本文にある通りインド航路の開拓によりポルトガル絶対王政の黄金時代を築いたことから、〈幸運王〉とも称される。

の足に斧を加えたり、自身の神経を断ち切ったりすることに他ならない。教皇の特許は悪用され、その教書が定めた分の二倍もの土地が売りに出された。そして教会収入の減少の故にそれは、あたかも神に対してなされた犠牲であるかのようにすら観じられたのである。収入の一部を利用することは、聖職者たちにとっては概して受け入れやすいやり口には違いない。それはなかんずく共和国には、しばしば必要なことと言えよう。それはフランスにおける先の内戦において、見られたところのものである。その際に聖職者たちは、王に対する 2000 万スクーディに達する献金の支出の大半を受け持ったのであった。スペインでは聖職者たちが多年にわたって、70 隻の武装ガレー船に必要な費用を受け持つと同時に、その倍額以上の献金を行っている[13]。

第七章　臨時課税について

我々は既に通常の税収について論じ終えた。これに加えて君主はその臣民及び外国人に由来する、他のいくつかの臨時収入源をもっている。彼らはその人民から権利の失効に伴う、資産の没収に伴う、罰金刑に伴う、また寄付に伴う収入を獲得する。他方で外国人から彼は貢物や年金、恩給等々を手に入れる。それらは全て通常の税収のところで語られたのと同様のやり方で、利用され支出されなければならない[14]。このようなやり方で自身の収入を管理する者は将来に備え貯蓄すべき金銭として、その一部を取り分けて置く必要があろう。

---

[13] 1590 年のローマ版以降の諸版において本章は、「しかし教会から調達された金銭によりなされた事業が、目覚ましい成果を上げたことを、小生は直接見たことも書物で読んだこともないと告白せねばならない。それはむしろ常に失敗に終わったように小生には観じられる。またたとえそれが時によっては成功をおさめたとしても、勝利に相応しい成果をあげることは決してなかった」という見解により締めくくられている。

[14] 1598 年のミラノ版以降の諸版において本章の個所には、「ある君主の権勢をその通常の収入に基づき評価してはならない。それはむしろ彼が非常の手段を通じて金銭を調達する便宜により量られるべきである。そこから明らかとなるのは、大半の君主が通常の収入を売却してしまったりそれを抵当に入れてしまったりした結果、それを失ってしまい、非常の手段に頼ってその財政を維持しているということに他ならない」という一文が続いている。

第八章　不適切な支出や無用の贈与を避けること

不必要な支出とは即ち、公共善に即した目的を有さない、国家に対して如何なる利益も安全ももたらさない、国王に対して如何なる偉大さも名声ももたらさないような支出のことである。こうした支出は際限がない。なぜなら人間の虚栄には限度というものがないからだ。だがこのことについて我々は既に他の個所で語っているから、別の話題へと話を転じることとしよう。何よりまず大切なのはある規準に従って恩典を授けることである。恩典はそれに値する人物に、しかも節度を保って授けられるべきである。というのも、もし先立った功績もないままに恩典が授けられるなら、それはこうした恩典に値する人物を辱めることとなる。こうした偏頗な恩典の授与が、いくつかのキリスト教国家に大騒動を引き起こしてしまったのだ。それにもしこうした恩典の授与に節度がなければ、恩恵の泉は早晩に枯渇してしまうことだろう。そうした訳で君主は実にしばしば、鷹揚から強欲へとその生き方を一変してしまうことになるのである。ネロ帝は彼が統治した 14 年間に 5000 万スクーディにも及ぶ恩典を授けた。そのためその後継者たるガルバ帝は、彼らに与えられた金額の十分の一を残して、ネロによってなされた恩典の全てを回収する法令を発した。ネロ帝は多額の金銀を分け与えたあげく、自身の浪費の財源がなくなったため、殺人へと走るようになってしまったのである。またカリグラ帝も同じ手を使うに至っている。

第九章　剰余金を如何に保全するか

君主が阿諛恩倖の徒やそれに類する者たちから自身を守ることは、大変難しいことである。もし彼が金銭を手にしたなら、自身がそれに手を付けるのが容易でないようにすべく、策を施しておかねばならない。このような施策は、古代人もいろいろなやり方で行ったところのものである。アウグストゥス帝は帝国財政の余剰金を、利子つきで貸し出した。同様にアントニウス・ピウス帝も、5%の利子つきで金銭を貸し出している。アレクサンデル・セヴェルス帝も同じ手を使った。だが如何なる君主といえども、利子つきで金を貸すという例にならってはならない。それは単にこのことが君主にふさわし

くないことであるからのみならず、道理や聖なる訓戒にもとる行為だからに他ならない。利子をつけずに金銭の貸し出しを行うという行為には、二つの利点がある。一つには彼の資金をこのように別途の貸付金にしておくことで、保全することが出来るだろう。また一つにはこのようにすることで、臣民に利便を提供し、それを増殖させる機会を提供するからだ。そのことは結局、君主自身の利益となって跳ね返ってくる。ローマ人たちは平時には自身の富を、金の延べ棒というかたちで蓄積していた。モロッコの諸王はその富を、巨大な包みの中に入れて保管している。彼らはそれを、彼らの大モスクの丸屋根の上にしまっているのである。今日の君主たちは彼らの金銀財宝を、壁に塗りこめたり地下に埋めたり或いは鉄製の行李の中にしまい込んだりしている。マントヴァのグリエルモ公はそれらを戯れに、大悪魔たちと称している。彼が金銭のことをこのように言ったのは、何と至当なことであろうか[15]。

第十章　人間

ここで我々は、国力の真の源である人間について語ることとしよう。なぜなら国力の他の諸要素は結局、このことに帰着させられるからである。豊富な人口を有する国家は、その他の点においても富強となるからである。なぜなら以下の私たちの議論が示すように、人間の才能と努力こそが、これらの利点をもたらすからに他ならない。従ってここでまず何にも先立って私たちは、人間ないしは人口という言葉と国力という言葉を、区別するとなく使うこととしたい。ところで人間については二種類の力が存在している。即ちその数とその資質である。

第十一章　多数の人口を擁することについて

第一に多数の人口を擁することが国家には必要なこととなる。何となればセルヴィウス・トゥルスが言っているように、大事を為さんと欲する都市国家にとり、その市民が多数に存すること以上に重大なことはないからだ。多

[15] 1590年のローマ版以降の諸版においては、本章に続いて「質素倹約も度を超すものであってはならない」と題される一章が付け加えられている。

数の人口を擁することにより都市国家は軍事的対比の上で、確固とした優越を占めることができる。何故ならそうした都市国家は市民の数が少なければ、ペストの猛威やその他のいくつかの災難により、容易に破滅してしまうからである。それは正にスパルタ人の上に生じたことだ。レウクトラの戦いにおいて1300名の市民を失いテーベに敗北を喫するや、彼らはギリシアにおける覇権をあっけなく失ってしまった。またテーベ人やアテネ人も、フィリポス王との戦いで敗北するや、決定的な没落を見るに至っている。反対にローマ人の場合、彼らがその民族的資質によって世界をその傘下におさめたのは無論であるが、それに劣らずその無限ともいえる人口の力もまた、その覇権の獲得に貢献したのだった。なぜなら彼らは多数の人口を擁していたので、イタリア、ガリア、スペイン、サルディーニャ、シチリア、マケドニアと、互いにきわめて離れた複数の地で戦線を維持することが出来たからである。一度や二度の敗北で彼らは意気阻喪することなどなく、それどころか軍隊の大敗北により返って戦意を高揚させ、また国家の荒廃にもかかわらず意気軒昂となったのである。だからこそキネアはローマを指して、多頭のヒュドラと称したのである。ピュロス王はローマ人に大勝したにもかかわらず、彼らがすぐに強力な軍勢を再興したのを見た[16]。それに困惑した王は、軍事力を使って彼らを打倒することはできないと悟り、空しいことながらローマ人との和平交渉にとりかかることにした。多数の人口はローマにまた言うまでもないことながら、カルタゴ人との戦いにおける勝利をもたらす要因ともなった。なぜなら敵のカルタゴ人と比べても、ローマ人の側の死者の数は明らかに多大だったからである。第一次ポエニ戦争に際してローマ側の五段櫂船の喪失数が700隻に達したのに対して、カルタゴ側のそれは500隻に過ぎなかった。第二次ポエニ戦争においては、全戦役中のカルタゴ側の死者数より多数の兵

---

16 ピュロスは紀元前3世紀初頭の地中海世界において活躍したエピルスの王（在位前307-前302及び前297-前272）。アレクサンドロス大王に次ぐ卓越した軍略家として知られた。ローマ軍に対してヘラクレアの戦い（前280）、アスクルムの戦い（前279）と連勝したが、ローマ軍の抵抗のため決定的な勝利を得ることが出来なかった。

力をローマ側は、たった一回のカンネーの戦いで失っている。ピュロス王との戦争やヌミディア戦争[17]、ビリアト戦争やアテニオーネ戦争や同盟市戦争[18]、Q・サルトリウスの戦争やスパルタクスの乱その他多数の戦役にあたって[19]、敵の死者数よりも多数の死者がローマ側に出たことを、誰も否定することはできないだろう。だがそれにもかかわらずローマ人たちは、その尽きることの無い人口の力により、勝利者の地位を確保したのである。古のアラビア人やサラセン人、タルタル人ども、そしてまた当今インドを震撼せしめたマサゲタイの王マムーディオやトルコ人どもは、常にその人民の資質によってではなくその人民の多数によってその大事業を推し進めた。また次のことも付け加えたい。即ち人口の富む国は資金にも富むものなのだと。なぜなら人口が多ければ税収が増えるし、そうなれば国庫に当然ゆとりができるからである。イタリアにもフランスにも金山も銀山もない。またヨーロッパの他の地域に比べて、それ以外のあれこれの種類の鉱山に富んでいる訳でも無い。だがこの両国は他の何物でもなく正にその住民数の多さによって、商業と交通を媒介に世界の果ての地からすら、金銭をそこに引き寄せているのである。というのも多くの人口があるところには労働力があるため、大地は極めて良く耕されることになる（スイダの記す処では彼の時代フランスでは、人々の

---

17 エピロス王ピュロスはイタリア諸都市により招かれ、ヘラクレアの戦い（前 280）とアクスルムの戦い（前 279）でローマ軍に相次いで勝利をおさめたが、後者の執拗な抵抗を見てとり撤収を余儀なくされた。他方ヌミディアの王ユグルタは王家内の継承争いを経て地中海の覇者ローマ共和国に反旗を翻し、前 112-前 106 にかけ激しい抵抗戦争を繰り広げた。この戦争の経緯は古代ローマの歴史家サルスティウスの『ユグルタ戦記』に詳しい。

18 従来ローマと同盟関係を締結していたイタリア内諸都市は、ローマによるイタリア支配の展開の中、次第にローマとの権利上の格差に不満を抱くようになった。ローマ市民と同等の市民権を要求する同盟市に対し、ローマ側が市民権の付与を拒絶したことを契機にローマと同盟諸都市の間に生じた戦乱が同盟市戦争（前 91-前 88）に他ならない。ローマの戦法を知る同盟市側に苦戦を強いられたローマが、後者の住民に市民権を付与することにより戦争は終結へと向かった。

19 逃亡剣闘士スパルタクスを盟主にローマ支配下の奴隷たちが解放を求めて立ち上がった反乱（前 73-前 71）。数度にわたりローマ正規軍を撃破したが、私費により大軍を編成したローマの政治家クラッススの軍勢に敗北し潰滅した。

精励というよりその多数によってフランスは耕作されていたという[20]。そして大地からは生活に必要な食料品がもたらされ、また工芸の材料も産み出されることになる。また物資の豊富さと技巧の多様さは、個々人と公共を共々に豊かにしてくれる。もしスペインが不毛の地と評されるとすれば、それは土地の欠陥によるものではない。それは人口の乏しさによるものなのである。というのもこの土地は実は極めて肥沃で、文明生活に資するあらゆるものの生産に適したものだからである。だからもしそれが耕作されるなら、古代のこの地がそうであったように、無数の人口を養うに十分なものなのである。実際古代にあってスペインの地はその住民のみならず、カルタゴ人やローマ人の大軍にすら食料を供給したのだ。この地域以上により長い期間、そしてより大きな力でローマ軍を苦しめた地もない。スペインでは原住民の軍勢が撃破されるが早いか、またたちまちそれより巨大な軍勢が湧いて出てくるという具合だったのである。だがこれ以上は確かなことがわからない古代のことに触れるのは控えよう。他方確かなことは、フェルディナンド王と彼が交わした戦争にあたり[21]、グラナダ王はその麾下に 50000 騎もの騎馬軍を有していたが、これは今日のスペインとポルトガルの騎兵を合わせても及ばない数である。スペインの荒廃の理由は土地の質が変化したからでも気候が変化したからでも無く、人口が激減し耕作面積が減少したからに他ならない。現代のスペインの人口が古代に比べて減ってしまった原因としては、まずは古のモーロ人によるスペインの征服が挙げられる。なぜならその時に、バルバリアに流刑にされた悪人どもやその他の人々の離散に加え、わずか三カ月の期間で 70 万人もの人口が失われたのである。このモーロ人による征服に続いて 700 年にもわたり続いた戦争が、スペインの人口減少の第二の原因と考えられる。この戦争はスペイン人がモーロ人との間に交わしたもので、ついに

---

20 この後の諸版においてはスイダ（10 世紀にビザンツ・ギリシア語により編纂された地中海世界に関する百科事典）ではなく、正確にストラボンの名（『地理誌』IV, I, 2）が言及されている。

21 グラナダの陥落（1492）に終わる両カトリック王（アラゴン王フェルディナンドとカスティリア女王イザベラ）によるナスル朝イスラム国家征服戦争のことであろう。これにより中世全般にわたり継続された、スペインのレコンキスタ運動が完了した。

は前者による後者のスペインからの追放が生じることとなった。その間に両者の間で無数の人間が不断に殺し合いを続けたのである。その結果として多数の都市と田園が破壊されてしまったのだ。だがこの国土回復運動の終結もつかの間、彼らスペイン人たちは自身の軍隊を、アフリカやナポリやミラノ、新大陸さらについには低地諸国の再征服にまで向け始めたのである。こうした軍事作戦によって数知れぬ人々が、武器にかかってかあるいはその他の不都合から死んだばかりではない。先に記したような諸地域に彼らスペイン人たちは、居住したり商売に従事したりあるいはその地に兵士として駐屯したりするために流出して行った。これらのことに加えてフェルディナンド王による勅令のことがある。それはポルトガルのマヌエル王によっても直ちに追随されたものだ。それによりスペインから 124000 家族のユダヤ人家族が追放されてしまった。それは人数にすれば 800000 人を算する。ことの重大さを見て取ったトルコ王バジャジッドは、フェルディナンド王の賢明さに驚き入ったと言わざるを得なかった[22]。なぜならこのようにしてフェルディナンドは、結局は自身の国家を富強にしてくれるはずの彼らを、むざむざ手放してしまったからだ。そのためバジャジッドはこのスペインからの追放ユダヤ人たちを、ロードスやテサロニケ、コンスタンティノープル、サンタ・マウラその他の地に喜んで迎え入れたのであった。かくしてこのスペインの地では、農業がすっかり衰えてしまうこととなる。というのもスペイン人は、生れつき武器を扱うことを好み尊大な性格をしているので、自ら進んで武人となり傭兵稼業により栄誉と利得を獲得している。他方で彼らスペイン人たちは土地の耕作を等閑にするばかりか、他の手仕事をも軽侮している。それゆえスペインにも増して、工芸や産業に乏しい国もないのである。こうしたことからスペイン産の羊毛も絹糸もその他の原材料も、ことごとく空しく国外に流出してしまうことになる。これらの原材料はその大半がイタリア人によって加工され、また耕地や葡萄園はフランス人により耕作されている。

---

22 皮肉な反語である。